

新春を迎えるにあたって

土木学会会長 岡 本 舜 三*

明けましておめでとうございます。土木学会も、創立59年を迎え、27,000人の会員を擁する大学会に生長しました。本年もまた皆様とともに国土の建設に邁進したいと思えます。

さて最近におけるわが国の土木技術の進歩はめざましく、その結果土木建設の旺盛さは目を見張るものがあります。そのことが人々の生活にさまざまな影響を与え、それが幸福をもたらしたかどうかについては、いろいろと評価があります。最近の新聞では否定的論調が強いようであり、それからただちに、技術に対する懐疑論を展開するむきさえありますが、それは飛躍であると思えます。発生している種々の問題は技術の進歩そのものの罪ではなく、用法の問題であります。用法さえ適切であれば技術の進歩は、必ず人々に幸福をもたらすものと確信いたします。

最近はあるのまの自然を礼讃する声が高いようですが、しかし、美しい国土はつくりだされるものであると思えます。自然は一般には荒々しいもので、これを治めて人間の生きていく最低の条件から高度の知的活動に至るまでの諸要求をみだす場をととのえ、人類に幸福をもたらすことは土木技術者の仕事であります。よくいわれを「水を治める」とか、「砂漠を沃野にする」とかは、代表的土木工事ではありますが、このような工事を行なう技術には自然環境に対する深い理解が必要であります。これに逆うと失敗し、これを御すれば成功するのであります。

こうした自然改良の初期的段階においては、人間の問題はあまり介入してきません。しかし、高度に発達した社会では、新しい形の自然改造が必要であり、そこには人間の問題がおきてきます。交通や都市の問題は人間関

係なしでは成り立ちません。こうした場合には、自然環境と人間生活の両条件に適合した技術が考えられるべきであります。それでないと幸福と同時に不幸をもたらし、総体的には不幸だとみなされることにもなりましょう。この点について技術なるものをあまりに狭義に考えすぎたわれわれの過去のあり方には、反省を要する点があったと思えます。しかし正しい意味での技術を向上させようとの意図を、ここで撤回するようなことは人間の幸福につながるものではないと思えます。

技術の進歩には、その基礎に豊かな科学があることが必要であります。それゆえ、われわれは広く人文および自然科学の進歩に気をくばり、技術の栄養源を豊かにすることを心がけねばなりません。しかも、その視野はたえず拡大される必要があります。しかし、科学だけでは仕事は実行されません。これを現実にもでし上げるのは技術であって、そこに非常に多くの技術研究が必要であります。日常の業務は最上の技術研究の場であり、研究室での考案は、ここでの研究を通してはじめて技術上の研究として実を結び、その蓄積が技術を進歩させるものと思えます。

本年も膨大な土木工事が予定されています。それを消化するのみでなく、業務を通じて研究を行ない、それを正確な記録に残すことによって、立派な土木技術を作り上げていくことが必要であります。こうした形で日本の技術を世界に知ってもらうことは、ようやく模倣の域を脱しすでに先頭の列に伍したわが国土土木技術陣の世界に対する責任のように思えます。

ともあれ、進みゆく技術の中でそれを担う一員として働くことは楽しいこととあります。日夜その道の研鑽につとめられる会員各位のご健康を祈って、一言所感を述べて年頭のごあいさつといたします。

* 正会員 工博 埼玉大学教授 理工学部建設基礎工学科